

中国及び本邦におけるソルガムの 既往の名称に関する考察

最 上 邦 章

要 約

最上邦章(1980)：中国及び本邦におけるソルガムの既往の名称に関する考察。
広島農試報告42：71～92

中国およびわが国におけるソルガムの既往の名称を収集し、命名の経緯、名称の変遷、分布などについて考察した。

中国におけるソルガムの名称は字義のみでなく音からの多様化があったことを認めた。

わが国藩政期以前のソルガムの名称は外来珍物の意から生じた「たうきび」、「もろこしきび」、形状から生じた「たかきび」、「たちきび」などで、地域により名称が異った。これらの名称は農村においては、1950年前後まで保持されていた。

明治期にはソルガムを用いた製糖の企画、海外知見の流入によって、名称は多様化した。作物名としては関東方言「もろこし」への統一が進んだ。大正期以降は中国大陸への本格的な侵攻の反映として、彼地の名称が、現地音を伴って流入した。

第2次大戦後はアメリカからの名称の流入があった。

I. 緒 言

D・カンドル²⁾は、ソルガムは赤道アフリカを起源とし、エジプト、インドを經由して、最後に中国に伝達された、中国におけるソルガム栽培の歴史は非常に古いものではない、と考えていた。これに対して Dogget^{3,4)}はソルガムは東アフリカからアラビヤを経て、B. C. 2000年頃インドに至り、インドから東南アジア沿岸を北上し、紀元1世紀には中国に渡来した、と考えている。さらに同氏⁴⁾は、ソルガムの中国への伝来は陸路—シルクロード—を經由した可能性もあり、もしそうであれば、渡来年代はさらにさかのぼる可能性がある、として、中国における新石器時代の遺址発掘の成果に期待を寄せている。

天野 [157]⁵⁾は、山西省萬泉県の新石器時代の遺址、遼寧省遼陽三道壕の遺址から炭化したソルガム子実が発掘されたことを紹介した。陳および葉 [156] は遼陽三道壕のほか、山西省庄家市庄村および陝西省西安西郊の戦国時代の遺址からも、ソルガムの存在を確認できる発掘物が見出された事実を挙げ、中国では B. C. 403～221年には既に、現陝西省から遼寧省にわたる広い地域

にソルガムが栽培されていた、と推定している。

今日、中国ではソルガムは、「我国最古の作物之一」[163, 165]とされ、「至少五千年の栽培歴史」[165]とされている。中国におけるソルガムの栽培の歴史は、5000年には及ばないとしても、上記でみる限り、2500年程度の歴史はもっとみられ、Dogget⁴⁾の予測は当を得ていた、といえるであろう。

ソルガムのわが国への伝播は、「中世中華より」、「中古支那より」[15, 17, 52, 55]等と記され、判然としない。わが国におけるソルガムの文献上の初見は、柴田 [151]によると、1304年に刊行された医書「頓医抄」⁶⁾であるとされ、「本草和名」や「倭名類聚抄」には記載されていない [15]。

1600年代以降に刊行された本草書、農書には若干ずつの記載があるが、いずれも概括的な記載にとどまり、断片的な資料の域を出ない。この情況は、明治以降についてもほぼ同様で、ソルガムを体系的に、的確に記した文献は1943年の広瀬 [113]を待たなければならなかった。

1972年以来、筆者はソルガムの既往の栽培事情についての資料を収集してきた。1980年9月末現在で、その数が160編を越えたので、今回そのとりまとめを行なうこととした。本稿はその第1稿をなすもので、名称を対象

注：後述するが □ は稿末別表1からの引用である。

としている。往時のソルガムの名称、命名の由来、変遷、地域的分布などについて、育種事業で得た知見を援用しながら、考察を加えてみたい。

II. 資料及び用語

1980年9月末日現在、筆者が収集し得た資料は別表1に示した通りである。特殊なものを除いては、いずれも子実用、製糖用（シラップ用）および籐製造用のソルガムを対象としたもので、青刈・サイレージ用のソルガムに関する資料は除いた。海外の資料は、中国のものだけを含め、その他は除いた。

資料は合計166編、内容は原著論文、著書の抜粋、地図、統計表など、雑多である。この内、中国の資料は15編、残り151編はわが国で執筆、刊行されたものである。日本文献の刊行時代別の構成は、藩政期（1867年）以前が21編、明治期（1868～1912年）が36編（一部復刻分を含む）、大正期（1913～1925年）が16編、昭和前期（1926～1950年）が55編、昭和後期（1951年以降）が23編、である。

本稿では名称を扱う関係上、全体を通じて用いる作物名を定めておく必要がある。従来、わが国では、蜀黍（もろこし）、高粱（コーリヤン）、蘆粟（ろぞく）、ソルゴー、ソルガム等、多様な作物名が用いられてきた。この内「ソルガム」は使用された年代が新しく、1960年以前にはほとんど出現しない。また、「ソルガム」は属名（genus）でもあるため、以下で扱うソルガム全般を包括している。この二つの点から、本稿では、考察の対象となる名称以外の作物名の表示は「ソルガム」で統一することとした。

本稿には2種の文献引用がある。別表1に示した資料から引用する場合には、著書名、著者名または引用文の末尾に〔資料番号〕をもって示し、その他の場合には、稿末の引用文献と対応させて、従来と同じ方法によって示した。

III. 諸外国におけるソルガムの名称

本論にはいる前に、ソルガムの名称の全容を把握する意味から、諸外国におけるソルガムの名称を紹介してみたい。

広瀬〔113〕は、「高粱攷」に次の様に記している。

「学名 Andropogon sorghum Brot.

満州国名 高粱、紅糧、高糧、黍米

注：「surgu」は「起す、高める、立ち上がる、生ずる、現われる」の意味をもつ。

日本国名	蜀黍、モロコシキビ、タカキビ
独国名	Mohrhirse, Mohren hirse
英国名	Great Millet, Indian Millet, Grain sorghum.
佛国名	Sorgho, Sorgo
米国名	Feterita, Kafir, Milo, Durra, Shallu
蘇連名	Gaolyan, Gaolian
印度名	Jowar (Dholam)
アラビア名	Dochan
エジプト) 名 Dari
パレスティン	

又産地により Kaffern hirse, Niger corn, Guinia corn, Sorgh hirse 等と称せらるる。

永井〔91〕は次の様に解説している。

「欧州にては1300年頃 Petrus de Crescentis により蜀黍が“Sorgo”, “Milica”, “Melga”, “Melica”, “Saggiana”等の名称で知られている。学術上には1542年 Fucks は始めてこれを記載し、1720年 Micheli により Sorghum 属が設けられた。古代独逸語にては Hirse は Panicum をいひ、ヘブライ語で“Dokhan”といひ、西部欧州にては最初 Milium indicum と呼んだと云ふ。南部スラブ語では“Sireck”といひ、仏語にて“Grand millet”, “Grosmil”, “Millet d’ Inde”等の名称がある。アフリカに於ては“Douro”, “Dori”, “Durrha”, “Dhorra”, “Kafir”等の名称で呼ばれ、印度では“Shallu”といふ。」

今日、ソルガムの学名は Sorghum vulgare Pers. または S. bicolor Moench とされている⁸⁾。前掲の Andropogon〔113〕のほか、かつては、Milium, Holcus, Panicum などの属名も用いられた。Sorghum はラテン語の Surgo⁹⁾を語源とし、「隆起又は塔の意味で、他の作物の上に遙かに聳ゆるやうな」〔113〕もの、を意味するとされている。

佛国名の「Sorgo」は本来は「Sorghum」と同義語である。しかし、今日、「Sorgo」はシラップまたは青刈・サイレージ用の甘茎ソルガムを示す用語として用いられている。わが国ではシラップ用ソルガムの栽培がないため、「ソルゴー」は青刈・サイレージ用の、長稈のソルガム全般をよぶ名称として用いられている。

「Sorgo」が本来の意味から、甘茎ソルガムに限定して用いられる様になったのには19世紀中期以降のアメリカにおけるソルガムの導入事情が関係している^{7,9)}。すなわち、1851年、上海駐在のフランス領事コート・デ・モンチグニーは、長江（揚子江）河口の崇明島で栽培されていた甘茎ソルガムの種子を、本国の地学協会に送

付した〔44, 49〕。この種子は、1853年、Sorgo の名で、フランスからアメリカに移入され、U.S.D.A. によって、1857年増殖、“Chinese Amber” の名で配布された⁷⁾。これとは別に、1857年、英人 Leonard Wray は、Harace Greley の要請に基づいて、ナタール産の甘藷ソルガム16品種をアメリカに持参し、S. Colorado と Georgia で試作した⁷⁾。導入時、Wray の導入種は、ナタールにおける呼称“Imphee”で総称されたが、後には、Chinese Amber とともに、“Sorgo”の名でよばれる様になった⁷⁾。

米国名として掲げられた名称は、今日では品種群の名称として知られている⁹⁾。これらの名称はその多くが取寄元におけるソルガムの呼称の様である⁹⁾。このほか、Guinia-corn, Chicken-corn, Egypt-corn などの名称も用いられた⁷⁾。「Milo」の名称は後年、わが国でも用いられるが、これはアメリカでは Milo 系品種が多く栽培され⁹⁾、アメリカからの輸出ソルガムに Milo の名称が付されていたからである。

新しく、珍物が導入され、その名称が不明である場合には、取り寄せ先における名称をそのまま、または一部変更して継承したり、その形状や利用法に着目して名称が付されたりする事が多い。この状況はソルガムでも等しく認められ、以上に述べた様に、ヨーロッパ、アメリカ等の移入地では、既往の名称、現行の名称とも、この原則に従っている様である。

Ⅳ. 中国におけるソルガムの名称

中国におけるソルガムの既往の名称を本草書、農書から抜粋して、名称に付された穀物別に分類して、第1表に示した。

「農書」〔2〕は、「形類黍故有諸名」と記しているが、ソルガムの名称には「黍」のほか、「稗」、「稷」、「粟」、「秬」、「粱」、「粮」、「穀」、「子」などが付されている。「多識篇」〔5〕によると、ここに用いられている穀物名の和名との対応は、「黍」は「幾比今按毛知幾比」、「稗」は「稷の異名」、「稷」は「今按幾比」とされ、今日のキビと解される。「粟」は「阿和」、「秬」は「今按毛知阿知」、「粱」は「今按於保阿和俗云在留阿和」と注解され、今日のアワに相当する。この和名対応には異論〔87, 157〕もあるが、後述の様に、付された穀類の意義は必ずしも重要性が高いとは思われないので、本稿は「多識篇」〔5〕に従うこととする。

「粮」は「穀物の食糧」の意で穀物全般を指し、「子」は「子実、種子」、「穀」は「もみがら、かわ」の意であ

る¹⁾。

天野〔157〕は「中国原有の草木虫魚は、北京大学の齊思和教授も云われるように、ほとんどみな一字で表現せられ、外来語は中国固有の名詞の上に形容詞を付すか、外来音を付すかしている」と述べている。この観点から第1表に示したソルガムの名称をみると、いずれも既存の穀物に形容詞を付した形をなし、これらの名称が渡来物に対して付されたものであることを伺わせる。

「本草綱目」〔3〕は「種始自蜀、故謂之蜀黍」と、「農書」〔2〕は「蜀黍以種來自蜀」と記し、蜀（現四川省）から栽培が始まったために、「蜀黍」、「蜀黍」の名が付されたと述べている。また、「本草綱目」〔3〕は「高大如蘆荻者、故俗有諸名」と、「群芳書」〔4〕は「形類黍稷而高大如蘆荻故有諸名」と記し、高さや大きさが蘆荻（あし、よし）の様であるため、多くの名称がある、としている。「古名録」〔26〕には「品字箋」からの引用として、「此種高丈余。一人一騎蔽其中而不能見、故名高粱」と記し、馬にのった人が、かくれて見えない位に高いので、「高粱」の名が付された、と述べている。

「狄粱」の名称は、「本草綱目」〔3〕に「蜀黍不甚経見、而今北方最多」の記載がある点からみると、狄、すなわち、北方の外敵、の食糧の意とも解されるが、後に述べる“音”からみると、狄と荻とが同音である¹⁾ために荻粱⇔狄粱の変化が生じたのかもしれない。

「茭子」の名称は、「マコモの茎の新芽の茎が黒穂病菌によって肥大したもの」を意味する「茭」と子実の意をもつ「子」とが結合されたもので、形状の類似性に基づいたものである¹⁾。

以上の様に、ソルガムの名称を字義の面からみると、既存の、類似する穀物名に、渡来地または栽培開始地（たとえば蜀）、類似の形状をもつ既存の植物名（たとえば蘆、荻、木など）、あるいは性状（たとえば高）などが結合されて、つくりあげられた、とみなしてよいであろう。

中国におけるソルガムの名称は地域により異なった、と思われる記載がある。

「植物名実図考」〔27〕には「北地通呼曰高粱」と記され、同書に引用された「閩書」では「北人曰高粱、泉曰番黍、浙人曰蘆稗」と記し、「食物本草」〔29〕は「南人呼蘆稗」と記載している。さらに、「古名録」〔26〕には「品字箋」からの引用として、「北地所謂高粱也」、「又云江南呼爲蘆粟」と述べ、「重修本草綱目啓蒙」〔22〕には、「泉州府志」では「蘆穀」、「山東通志」では「秬蜀」、「撫州府志」では「薯黍」が用いられてい

第1表 中国におけるソルガムの名称

名称に付された穀物名 ¹⁾	同左中国音 ²⁾	ソルガムの名称 (中国音) ²⁾
黍 (もちぎび)	shu	蜀黍 (shu shu), 蜀黍 (shu shu), 薯黍 (shu shu) 番黍 (fan shu) 蘆黍 (lu shu)
稌 (きび)	ji	蘆稌 (lu ji), 狄稌 (di ji), 荻稌 (di ji)
稷 (きび)	ji	稷 (ji) 蘆稷 (lu ji) 木稷 (mu ji)
粟 (あわ)	su	蘆粟 (lu su)
秬 (もちあわ)	shu	蜀秬 (shu shu), 蜀秬 (shu shu), 穉秬 (shu shu) 秬蜀 (shu shu), 秬秬 (shu shu) 粟秬 (liang shu)
粱 (あわ)	liang	高粱 (kao liang) 狄粱 (di liang), 荻粱 (di liang)
糧 (こくもつ)	liang	紅糧 (hong liang) 黃糧 (huang liang)
穀 (か)	ke, qiao	蘆穀 (lu ke)
その他		茭子 (jiao zi)

注) 1) 和名との対応は「多識篇」[5]によった。

2) 中国音は愛知大学中日辞典編纂所編 (1968) によった。

る、と記している。

「北地」、「北人」は現在の華北平原北部を指すが、ここではソルガムは「高粱」とよばれている。「泉」、「泉州」は現在の福建省(閩)泉州市一帯を指すが、ここでは「番黍」、「蘆穀」とよばれている。現在の江西省撫州市附近では「蕃黍」、浙江省では「蘆稌」とよばれている。「江南」は長江(揚子江)中・下流の南岸一帯を指し、現在の江蘇省、安徽省南部に相当する。ここではソルガムは「蘆粟」とよばれている。山東省では「蜀秬」の逆順、「秬蜀」がソルガムの呼称である。

これらの記載の多くは「蜀黍」あるいは「蜀秬」の注解として示されたものであるが、当時の文化の中心地であった華中では「蜀黍」、「蜀秬」が多く用いられていたとみなしてよいであろう。

以上から考えると、「蜀黍」、「蜀秬」系の名称は華中の、「蘆稌」、「蘆粟」および「蕃黍」系の名称は華南の、「高粱」は華北または東北地方の名称であったとみなしてよいであろう。

呼称があり、これに文字が付される、という経過は、文字がことばを記録する手段としてあることからみて、

一般的な流れと認めてよいであろう。

ところで、既述のソルガムの名称を中国音で表わすと、共通音がきわめて多い。第1表の穀物名をみても、黍と秬とは shu、稷と稌とは ji、粱と糧とは liang、粟は su、子は zi、穀は ke、である¹⁾。また、穀物名以外の文字も、蜀(蜀、穉)と薯とは shu で、黍や秬と同音である¹⁾。蘆は lu、高は kao、木は mu、荻と狄とは di、番と蕃とは fan である¹⁾。従って、「蜀黍」は shu shu であり、「蜀黍」、「薯黍」、「蜀秬」、「穉秬」、「秬蜀」、「秬秬」はすべて shu shu と発音される。「蘆稌」は lu ji であるが、「蘆稷」も同音である。「荻粱」は「狄粱」と同じく、「高粱」と「高糧」も同音である。

これらの事実は、ソルガムの名称を表記する際に、黍↔秬、稌↔稷、粱↔糧や黍↔秬↔蜀が相互に入れ替った経過があったことを伺わせる。字義の面からみると大変不自然な「秬秬」や「蜀秬」の逆順である「秬蜀」の存在も、音を文字化する過程で文字の入れ替りがあった、と考えれば、納得できる部分が少なくない。

天野 [157] は「蜀黍、蜀秬、巴禾、木稷、高粱の文字に表現されるキビとアワの属の混同を、見逃してよい

ものか」と疑問をなげかけているが、音の類似性から異なる文字で表記された過程があった、と考えれば、原因の一端は説明できるのではないであろうか。

現在、中国におけるソルガムの作物名は「高粱」で統一されている [155, 156, 163~166]。この名称は既述の様に北地の呼称であった。しかし、中国の在来ソルガムが、国際的には kaoliang の名で呼ばれ、共通語として北京官話がとりあげられたこととも呼応して、この名称が統一名称の位置を占めるに至ったのであろう。

V. 本邦における藩政期以前のソルガムの名称

中国におけるソルガムの名称、「蜀黍」とわが国における名称とを対置させた最初の文献は「多識篇」[5]であろう。これによると「蜀黍 和名 今按俗云多字幾比。増補 毛呂古志幾比。異名 蜀秫。増補異名 蘆粟 蘆粟、木稷、荻粟、高粱」と記され、わが国では、往時ソルガムを「たうきび」または「もろこしきび」とよんでいた事が知られる。このことは第2表に示した藩政期の刊行物における「蜀黍」に対する注解や訓からも確認できる。なお、「多識篇」[5]の記載中、「蘆粟」が「蜀黍」の異名とされている点、「高粱」は「カウリヤン」ではなく「カウリヤウ」と訓されている点は、明治、大正期におけるソルガムの名称と強く関連するので、注目しておく必要がある。

柴田 [151]によると、わが国における「たうきび」の文献上の初見は、1304年（嘉元2年）、梶原性全の所撰になる医書¹⁰「頓医抄」であるとされている。同書には「癩者若腫者、醋唐黍陶砂和之可付也」の記載があると、「古名録」[26]に記されている。また、「古名録」[26]は、「室町殿日記」¹¹にも「たうきひ」の名が記されている、としている。

「和漢三才図会」[15]には次の記載がある。

「按蜀黍古者無之、始是干食物本草、故倭名抄亦不載之、後自中華渡種乃黍之屬也。仍称唐黍以別黍稷、凡珍物始来、未知所以其名者皆加唐字呼之」

「本朝世事談綺」[17]は「もろこしきび、珍物はじめて渡るにその名を志らず、よって唐の字を加えてよぶなり」と記している。

これらの記載から、「たうきび」は、唐芥子（蕃椒）や唐柿（無花果）などと同じ様に、名も知らぬ珍物が渡来し、これを既存の類似物と区別する意味から、唐の字を付してよんだことに由来していることが知られる。同

時に「もろこしきび」は「唐」を「もろこし」とよんだために生じた名称で、起源は「たうきび」と同一のところにあったことも伺うことができる。

「農業全書」[11]には次の記載がある。

「是れを唐きびとも、はなはだ高くのびぬるゆえ、高黍とも名付くるなり」。

「成形図説」[23]は「高黍 黍にして長高く植をもつて名く」と記し、「立黍」の名称を併記している。「和爾雅」[10]は「蜀黍」に「タカキビ」の訓を付している。

これらの記載は、ソルガムの名称として、「たうきび」、「もろこしきび」のほかに、「たかきび」、「たちきび」があったことを物語っている。

以上のほかに、第2表に示した様に、「³黍⁴黍」、「もろこし」、「³穂⁴黍」、「³帯⁴黍」、「さんさらもろこし」、「ほうきもろこし」、「ほっすきび」、「くろきび」などがあった様である。

「³穂⁴黍」[7]は果梗 (Peduncle) の形状変化を扱った名称で、果梗がカギノテに湾曲した、いわゆる *goose neck*^{7,9)} の品種を示す名称である。「カギモロコシ」[22, 28]、「カモクビモロコシ」[28]も同じもので、「重修本草綱目啓蒙」[22]には「甲州、豆州ニカギモロコシト呼ブモノアリ、ソノ穂鉤ノ如シ」と記している。

「³穂⁴黍」は「成形図説」[23]に記載されている名称であるが同書はこれに「亦³帯⁴黍とも云其穂の帯になるを以てす。」と註している。

「さんさらもろこし」、「ほっすきび」、「くろきび」は「本草図譜」[24]に記載されている。同書 [24]は図を付した上、次の註を加えている。

「穂は節ことに数枝を簇生し枝弱く実熟するに随いて下垂すること副草 (アブラススキ) のごとくその実花殻黒色、穂を採りて箒を製す」

従って、「³穂⁴黍」、「さんさらもろこし」、「ほっすきび」、「くろきび」は、いずれも箒製造用に穂を利用するソルガム、*Broom corn*^{7,9)}を指していると解してよい。しかし、「³穂⁴黍」、「くろきび」は、後世まで、*Broom corn* のみを指す用語として用いられたか否かについては、確証を欠いている。

「三尺黍」、「三尺モロコシ」の名が「大和本草」[14]および「重修本草綱目啓蒙」[22]にみえる。また後者には、第2表には含めなかったが、次の記載がある。

「ナガモロコシ、ムラサキモロコシ、ハダカモロコシ、カギハダカ、シヤクナガモロコシ、オホモロコシ、ウルチモロコシ、モチモロコシ、白モロコシ等ノ品種アリ」

これらは「三尺黍」を含め、品種としての記載である。

注：楳林長教の手になるとされているが詳細不明。

第2表 わが国藩政期以前におけるソルガムの名称

刊行年	著書名	ソルガムの名称
1304	頓医抄	唐黍(タウキビ)
不明	室町殿日記	たうきひ
1612	多識篇	多字幾比(タウキビ), 毛呂古志幾比(モロコシキビ)
1629~54	清良記巻七	唐黍(タウキビ), 鑑黍(カギキビ)
1671	関甫先生食物本草	蜀黍(タウキヒ)
不明	百姓伝記	もろこしきび
1694	和爾雅	もろこしきび, タカキビ
1697	農業全書	唐きび, 高黍
1697	本朝食鑑	蜀黍, 唐黍
1698	広益本草大成	蜀黍(シヨクシヨ, トウキビ)
1708	大和本草	三尺黍, 蜀黍
1713	和漢三戈図会	蜀黍, たうきび, 唐黍
1722	農譚薺	蜀黍
1733	本朝世事談綺	唐きび, もろこしきび
1769	食療正要	蜀黍(タウキビ)
1775	諸国方言物類称呼	たうきび, もろこし(東国), きみ(中国), たかきび(伊予), ほきび(加賀), せいたかきび(越後), たちきみ(津軽), たうきび(畿内)
1788	万宝節用富貴蔵	蜀黍(シヨクシヨ, とうきび)
1803	重修本草綱目啓蒙	トウキビ京, モロコシキビ東国, タカキビ四国, タチギミ津軽, コキビ肥前, ホキビ加州, キミ中国, キビ越後, セイタカキビ越後, カギモロコシ, 三尺モロコシ
1804	成形図説	高黍(タカキビ), 立黍(タチキビ), 穂黍(ホキビ), 諸越黍(モロコシキビ), ハハキキビ
1828	本草図譜	もろこし(江戸), たうきび, さんさらもろこし, ほうきもろこし, ほうすきび, くろきび
1834	本草六部耕種法	蜀黍(モロコシキビ), 高黍(タカキビ)
1843	古名録	タウキビ
不明	有用植物図説	モロコシキビ, タウキビ, カギモロコシ, カモクビモロコシ

「三尺黍」は「其茎蜀黍ヨリヒキシ, 其高三尺バカリニ不過」〔14〕, あるいは「一種三尺キビハ高サ三尺許リニスギス」〔22〕と註解され, これが短稈の品種であることがわかる。アメリカにおける短稈品種の出現は1900年代初頭である^{7,9)}から, わが国での短稈品種の出現は, アメリカよりも, 200余年も早い勘定になる。また, 「重修本草綱目啓蒙」の刊行は1803年(享和3年)であるから, 当時すでに, わが国のソルガムには, 草型(カギ), 稈長(三尺), 穂長(シャクナガ), 護頰の被度(ハダカ), 子実の色(白), 粳糯性(モチ)などの特性の異なる, 多様な品種が存在していた事を伺う事ができる。

ソルガムの名称の地域間の差異については「物類称呼」〔19〕, 「重修本草綱目啓蒙」〔22〕, 「本草図譜」〔24〕の記載がある。また, 「農業全書」〔6〕は福岡藩

士の手により⁹⁾, 「成形図説」は島津藩の要請によって著され¹⁰⁾, 「清良記」〔7〕, 「百姓伝記」〔9〕はそれぞれ, 伊予および三河・遠江の農業事情を記している⁹⁾, 等の点から, 上記4書はある程度の地域性を反映しているものとみてよい。

まず, 「物類称呼」〔19〕, 「重修本草綱目啓蒙」〔22〕などによると, 畿内および京では「たうきび」, 東国および江戸では「もろこしきび」または「もろこし」, 中国では「きみ」, 四国および伊予では「たかきび」肥前では「こきび」, 加賀では「ほきび」, 越後では「きび」または「せいたかきび」, 津軽では「たちきみ」または「たちきみ」とよばれている。肥前の「こきび」は「粉きび」の意であろう。

つぎに, 「農業全書」〔6〕などの4書を見ると, 筑前では「唐きび」, 「高きび」, 島津藩では「高黍」, 伊

予では「たうきび」、「かぎきび」、三河・遠江では「もろこしきび」の名称が用いられている。

従って、両者を合せて考えてみると、「たうきび」は近畿を中心に四国および九州の一部まで、「もろこしきび」、「もろこし」は関東、東海地方で、「たかきび」は四国、九州の大半と北陸で、「たちきび」は東北で、それぞれ用いられていたとみてよいであろう。

ソルガムがいつ頃わが国に渡来したかは、さだかでない。しかし、1300年頭初までには、すでに渡来し、和名「たうきび」が付されていた。この名称と平行して、あるいは若干の年代のズレを持ちながら、関東では「もろこしきび」の名が発生し、「きび」が省かれて、「もろこし」の名で定着した。これとは別に、四国、九州、東北など、中央文化の到達の遅い地域では、その形状から、「たかきび」あるいは「たちきび」の名で呼ばれた。そして、これらの名称は、意識的に統一されることなく、一部の併用も含めながら、各地で、日常的に用いられていた。以上が、藩政期までの段階におけるソルガムの名称の大略である、と結論できよう。

Ⅶ. 明治期におけるソルガムの名称

明治期におけるソルガムの名称にはきわだった特徴が3点ある。

その1は、前章で述べた数種のソルガムの名称が、関東における名称「もろこし」に集中、単一化することである。新政府の重点施策、特に、教育の推進と教科書づくり、勸業政策に伴う指導者の養成⁶⁾、さらには東京山の手の言葉を中心とした共通語の普及促進などが名称の単一化に大きな力となったであろうことは容易に推定できる。

2点目の特徴は、勸業政策の一つとして、ソルガムを用いた製糖が企画され、これに伴って、新しい形のソルガムが導入され、命名されたことである。この事業は後述の様に、ピットマンの建白〔31, 35, 44, 99, 144〕に始まり、中国崇明島およびアメリカから、甘藷のソルガムを導入し〔31, 44, 99, 145, 146〕、これに「蘆粟」の名を付して、全国にわたり試作した〔32, 33, 35, 36, 37, 39, 44, 99, 147〕ものである。事業そのものは失敗に帰したが、甘藷のソルガムが全国に流布され、新しい形のソルガムを各地にもたらせた。

3点目の特徴は、海外からの知見、文物の移入によって⁶⁾、名称の単一化とは逆に、説明部、解説部に用いら

れる名称に多様化の兆しがみられることである。西洋農学の移入⁶⁾や日清・日露戦争を契機とする中国大陸への侵略は、ソルガムに新たな名称を加えさせるのである。

明治期を対象とする資料35編から、ソルガムの名称を見出しあるいは本文中で主要に用いられている場合（以下主要名称と呼ぶ）と本文中で説明用語として、補助的に用いられている場合（以下補助名称と呼ぶ）とにわけて抽出し、名称別に採用例数をまとめ、第3表に示した。

主要名称としては次の7つがあった。すなわち、「蜀黍（もろこしきび、もろこし）」、「蜀黍（たうきび）」、「蜀黍（訓なし）」、「蘆粟（ろぞく）」、「蘆粟（訓なし）」、「琥珀蘆粟」、「砂糖黍」、「箒蜀黍」である。

この内、「蜀黍」の文字で表記されている前3者は子実利用を中心とするソルガムに付され、「蘆粟」、「琥珀蘆粟」および「砂糖黍」は製糖用の甘藷ソルガムに付されていた。

子実用のソルガムに付された「蜀黍（訓なし）」は他の例からみて「もろこしきび」または「もろこし」とよまれた可能性が高いのであるが、もし、そうであれば、従来の子実用のソルガムは、1例を除いて、すべて、「もろこしきび」または「もろこし」の名称で表現されていることになり、関東方言による名称統一の方向が伺われる。なお、「蜀黍（たうきび）」は「農家必携」〔30〕からとった。本書は刊行年代は1876年であるが、その内容は「農業全書」〔11〕とほぼ一致し、藩政期のものに近く、明治期のものとしては異色である。

「蘆粟」のわが国への渡来について「明治前期勸農事蹟輯録」〔99〕は、萬年会糖蔗談話会（明治13年11月20～25日）における津田仙の講演として、次の様に記している。

「寧波ニ二十七年間駐在セシ米人妻嘉諦^{神田}カ明治七年ノコロ我文部省ノ御雇教師トナリテ東京ニ来ラレントキ同携ノ娘子カ（此娘子ハ支那人ニテ十二歳ノ少女ナリシ）蘆粟ノ一穂ヲ携ヘ来タリシヲ見テヲ府下本郷ノ文部省御用地内（既チ加賀屋敷）ニ在ル同氏ノ宅地ニ播種セシヲ以テ蘆粟ノ我國ニ伝来セシ嚆矢トナセリ」

「蘆粟」が製糖原料として、着目され、本格的に導入試作されたのは、これから2年たった、1876年（明治9年）のピットマンの建白以降である。「明治前期勸農事蹟輯録」〔99〕はその間の事情を次の様に記している。

「明治九年十月、土方太史ヨリ清国じょん・びつとまんノ蘆粟製糖ニ関スル建白書ヲ松方勸業頭ニ回付ス、右ハびつとまんヨリ土方太史宛蘆粟栽培書（うおるむてこるそん著蘆粟説）ヲ添付シテ我國ニソノ培養製糖ヲ起ス

注：「砂糖黍蘆粟の説」〔31〕によると「二十七年間清國に留遊し、当時は文部省御雇教師たる米人マツカテー君に質し云云」とあり、マツカテーとよむ。

第3表 明治期におけるソルガムの名称¹⁾

名 称	訓	採 用 例 数 ⁴⁾		
		主要名称 ²⁾	補助名称 ³⁾	
蜀	黍 もろこし(きび)	10	4	
	たうきび	1		
	(訓 なし)	9		
諸	越 黍 (訓 なし)		2	
	もろこし(きび)			
穂	もろこし(訓 なし)	1	1	
	唐 黍 (訓 なし)	3		
高	黍 (訓 なし)	4	5	
	たかきび	1		
立	黍 (訓 なし)	1	1	
	穂 黍 (訓 なし)	1		
高	黍 (訓 なし)	2	3	
	カオリヤン	1		
蘆 (芦) 粟	ろぞく	4	2	
	さとうきび	13		1
	さとうもろこし			1
	(訓 なし)	9		1
琥珀蘆(芦) 粟	(訓 なし)	3	2	
支那蘆 粟	(訓 なし)	1	1	
砂糖蜀 黍	(訓 なし)	1	1	
砂糖 黍	さとうきび	2	2	
琥珀 甘蔗	(訓 なし)		2	
ソルゴ			1	
ソルガム			1	
籐 蜀 黍	(訓 なし)	2	4	
鴨 首 蜀 黍			2	
合 計		40	46	

注) 1) 別表1の資料番号30~56, 58, 99, 144~147, 150, 161の35編を用いた。

2) 見出し, 本文中で主要に用いられている名称

3) 本文で説明のため補助的に用いられている名称

4) 並列併記されたものは同一の扱いとした。

ベキノ議ヲ建白セルモノニシテ, 土方太史ハ大久保参議ニ打合せノ上勸業頭ニ回付セルモノナリ

土方太史宛のピットマンの書翰 [99] の要部を抜粋すると次の通りである。

「別冊は揚子江ノナル崇明島ニ於テ専ラ栽培スル甘蔗ノ一種ヲ説キタル書ニテ数十年前発行スルモノニ付之ヲ

奉呈ス, 崇明島ハ近年流砂ノ集積シテ一島ヲ作シタルモノナリ, 右ハ支那ニテ蘆粟ト称フル物ナリ之ヲ日本ニ栽ウルコトハ極メテ容易ノコトナリ左スレバ必然日本産物ノ一種ヲ増加スヘキモノト考フ」

この建白によって, 「明治九年十二月上海総領事品川忠道ニ崇明島ニ産スル蘆粟種子五斤宛取寄方並栽培法取調方ヲ依頼ス」 [99], 「尚右ト同時ニ米國種蘆粟種子(琥珀甘蔗ト称スルモノ)ヲ輸入セルガ如キ」 [99] と記されている様に, 崇明島およびアメリカから種子が取り寄せられ, 試作されたのである。

「蘆粟」の字義についてはすでに述べた。また, 「多識篇」 [5] にも「蜀黍」の異名として「蘆粟」があげられ, これが長江中・下流南岸一帯におけるソルガムの呼称であったことも明らかにした。

わが国の甘基ソルガムの取寄元である崇明島はまさにこの地域にあり, ここではソルガム全般を「蘆粟」とよんでいたのである。取寄元における名称が移入地にそっくりもちこまれ, 定着する例はすでに述べたが, 「蘆粟」もその好例であるといえる。

「琥珀蘆粟」は Amber Cane の訳語である [44]。「Sorgo」の経緯については既に述べたが, 崇明島からフランスを経由して, アメリカに至った Chinese Amber およびその派生品種は一括して Amber Cane とよばれた。「蘆粟」が崇明島から直接わが国に導入されたのに対して, 「琥珀蘆粟」は西廻りに世界を一周して, わが国に至ったものといえる。

津田仙 [99] は「みねそた早熟琥珀甘蔗」の導入来歴を記しているが, これはアメリカから導入した Amber が Chinese Amber ではなく, これの改良種である Early Amber または Early Amber の改良種である Minnesota Amber であることを伺わせる。

いずれにしても, 「琥珀蘆粟」の名称は種子の取寄元における名称の邦訳に由来していることは明らかである。

補助名称については, 子実用ソルガム, すなわち「蜀黍」で表示されたソルガム, に対しては, 主要名称としてあげた名称のほか, 「諸越黍」, 「もろこし」, 「もろこしきび」, 「穂もろこし」, 「唐黍」, 「たかきび」, 「高黍」, 「立黍」, 「穂きび」, 「高粱」, 「カオリヤン」があげられている。「諸越黍」は「栽培各論」 [52] にみられるが, 使用者のふりがなおよび「成形図説」 [23] の記載から, 「もろこしきび」とよむべきことは明らかである。「高粱」も「栽培各論」 [52] にあげられ, 「北支那に於ても高粱と称して盛んに作りて」と記され, 北支那における名称として位置づけられている。「カオリ

ヤン」は「食用作物各論」[55]から採録したが、これも「支那名 カオリヤン(高粱)」と記し、中国における名称としている。しかし、「カオリヤン」が、「高粱」の現地音に由来しているのか、あるいは英字化されたKaoliangを邦字化したのかは解らない。

旧来の名称の、補助名称としての出現頻度は、「蜀黍(訓なし)」を「もろこし」または「もろこしきび」とよむとすれば、24例中「もろこし」系が12例(50%)、「たかきび」が5例(21%)、「たうきび」が4例(17%)、「たちきび」が1例(4%)、その他が4例(17%)で、「もろこし」系への集中が顕著である。

「蘆粟」の主要名称で代表される製糖用の甘藷ソルガムの補助名称は、四つの主要名称のほか、「蘆粟(さとうきび)」、「蘆粟(さとうもろこし)」、「支那蘆粟」、「砂糖蜀黍」、「琥珀甘蔗」、「ソルゴ」、「ソルガム」の7種である。このうち、「琥珀甘蔗」までの5種は日本(あるいは中国)型の名称であるが、「ソルゴ」、「ソルガム」は明らかに、西欧語の表音に他ならない。

「ソルゴ」は1876年(明治9年)、農学社刊行になる「農学雑誌」⁹⁾に連載された津田仙の論文「砂糖黍蘆粟の説」[31]に記されている。筆者は、これがわが国における「ソルゴ」の文献上の初見ではないかと考えている。同論文の主要部を抜粋すると次の通りである。

「武田君よりも其翌日に至り洋人ウオルヌステコルソン氏蘆粟の説と題せる訳本及び上海県志より抜萃せられたる蘆粟の略解を授与せられしに付余輩の所望今ま全く成りソルゴの訳名蘆粟にして其の己に本邦に伝れるを明解せり」

現地では、本来ソルガム全般を指す「蘆粟」が、わが国に至って甘藷ソルガムを指す名称に転化した。同様に、本来ソルガムと同義であった「Sorgo」がアメリカに至って、甘藷ソルガムを指す名称に転化した。そして両者が津田仙[31]によって結び合された。因縁話めくが、興味深い。

「ソルガム」の名称は、1881年(明治14年)刊行の「広益農工全書」[35]にみられる。「宇内産糖大別して四類とは第一蔗糖第二菓菜糖第三部糖第四穢糖是也。此外に二糖あり曰く菓糖曰く蘆粟糖是也」と記されている。「蘆粟」に「ソルガム」の訓を与えている。

「蘆粟(さとうもろこし)」以下の四つの名称は説明を要しないであろう。

「琥珀甘蔗」は既述の様に「Amber Cane」の邦訳であるが、ここに「甘蔗」が付されているのは、ビットマンの建白以来、「蘆粟」を「甘蔗」の一種とみなしていた[99, 144]からである。「砂糖黍蘆粟の説」[31]に

は次の記載がある。当時の碩学の実態の一端を示すものとして、興味深い。

「我儕は東国の産なるが故未だ実地に西南諸県地にて是迄培養し、砂糖黍甘蔗と称し来りし者を親しく見査せざるを以て其の果して真の甘蔗と同物なるや否やを確知せざれども之を近年書類に就て検探せしに英名「シュガルケン」羅典名「サカリユウ・チヒンナリウム」漢名甘蔗なる者とは全く殊別なるを発見せり、依て左に甘蔗の図と蘆粟の図とを掲載し看官諸君をして其の異殊なるを判断するの便ならしめん事を欲するなり」

製糖用の甘藷ソルガムの補助名称は上記の様に多様で、集中傾向はない。やと試作が始まっただけの作物であっただけに、人により、また入手した情報により様々によばれ、解説されたためであろう。

明治期におけるソルガムの名称は製糖用の甘藷ソルガムの導入、試作に伴って、新しいカテゴリーの名称が加えられた。同時に海外からの新知見の導入によって、註解、説明に用いられる用語は多様化した。作物名の表示に用いる名称は全国で統一する方向がうち出され、「もろこし」、「ろぞく」への集中が顕著にあらわれたと総括できる。

Ⅶ. 大正・昭和前期におけるソルガムの名称

大正期におけるソルガムの名称を第3表と同じ方法で抽出し、第4表に示した。

この時期は資料が少なく、しかも、その半数が籌蜀黍を対象としているため、傾向把握は難しい。しかし、その中にあっても、中国大陸との関係が明治期よりも、さらに密接になり、彼地におけるソルガムの名称が様々な形で流れこんできていることは明確によみとれる。すなわち、主要名称についてみれば、明治期には若干例をみるに過ぎなかった「高粱」系の名称が、かなり増加している点、補助名称については、「高粱」系名称と同時に、中国東北地方(旧満州)における名称が訓を伴って用いられている点に、その状況を推測することができる。そして、これらの名称がいずれも、中国大陸におけるソルガムを指す名称として用いられている点も見逃せないところである。

1926年から1950年(昭和25年)までを昭和前期と考え、この時期に刊行または、この時期を対象とした資料53編について、第3, 4表と同じ方法によって、ソルガムの名称を抽出し、第5表に示した。

採用例数は、主要名称が合計16名称、82例、補助名称が32名称、73例である。

第4表 大正期におけるソルガムの名称¹⁾

名 称	訓	採 用 例 数 ⁴⁾	
		主要名称 ²⁾	補助名称 ³⁾
蜀	黍もろこし	1	3
	ジュージ	1	
	(訓なし)	7	
もろこし		1	8
たかきび		1	
高	粱かおりゃん	1	5
	かうりゃん	1	
	(訓なし)	2	
かおりゃん		1	
高	糧かうれう	1	
紅	糧ほんりゃん	2	
黍	米うーみー	1	
箒 蜀	黍(訓なし)	6	1
箒	種(訓なし)	1	
普 通	種(訓なし)	1	
鴨 首	種(訓なし)	1	
普 通	蜀黍(訓なし)	1	
尖 穂	蜀黍(訓なし)	1	
黒 穂	蜀黍(訓なし)	1	
合 計		18	20

注) 1) 資料番号59~66, 68~74の15編を用いた。

2) 3) 4) 第3表に同じ。

用途別に名称の分布をみると、主要名称では子実用ソルガムに用いられたものが8名称、68例で最も多く、甘茎ソルガムに用いられたものが5名称、8例、箒用ソルガムに用いられたものが3名称、6例であった。補助名称については、子実用ソルガムが15名称、42例、甘茎ソルガムが7名称、13例、箒用ソルガムが5名称、10例であった。その他に、用途区分による「蜀黍」が5名称、8例あった。

子実用ソルガムの主要名称には、「蜀黍(もろこし、もろこしきび)」、「蜀黍(訓なし)」、「もろこし、もろこしきび」、「とうきび」、「せいたかきび」、「高粱(訓なし)」、「かおりゃん」、「マイロ」があった。採用例数は、合計68例中、「蜀黍」系名称が37例(54%)、「高粱」系名称が26例(38%)、「たかきび(キミ)」が2例、「マイロ」が2例、「とうきび」が1例で、「蜀黍」系名称および「高粱」系名称の採用頻度が著しく高かった。

「蜀黍」系名称は国内および朝鮮のソルガムを〔92, 101, 114〕、「高粱」系名称は中国、特に当時の満州におけるソルガムを対象としている。

「マイロ」は「雑穀の調理」〔126〕および「技術経営農業綜典」〔130〕に採用されている名称である。いずれも第2次世界大戦後に刊行されたものであるが、後者〔130〕には次の様に記されている。

「アメリカの旱地ではとうもろこしより多収で飼料用に作られ、近年放出食糧中のマイロと称するものも蜀黍の一種である」

この名称が、戦後の食糧不足時代に、アメリカから輸入されたソルガムに付された名称であることが明らかである。

子実用ソルガムの補助名称には、主要名称としてあげた8種のほかに、「しょくしょ」、「唐きび」、「けんせい」、「黍」、「こーりあん」、「高糧」、「紅糧」、「黍米」、「莢子」がある。

「しょくしょ」は「蜀黍」の音読であろう。「けんせい」は「食用作物相談」〔95〕に記されている。本書は当時の愛知県農事試験場に在職されていた岩槻信次氏によって著されたもので、「けんせい」は後年に刊行された「農作物の地方名」〔132〕でも、愛知県一部の名称としてあげられている。しかし、名称の由来は解らない。

「高糧」、「紅糧」、「黍米」、「莢子」はいずれも満州のソルガムの解説に用いられている。

子実用ソルガムの補助名称の採用例数は合計42例中、「蜀黍」系名称が12例(29%)、「高粱」系名称が12例(29%)、「たかきび」が6例(14%)で、主要名称におけると同様に、「蜀黍」および「高粱」系名称で過半が占められている。

甘茎ソルガムについての主要名称は「蘆粟(ろぞく)」、「蘆粟(さとうもろこし)」、「蘆粟(訓なし)」、「さとうもろこし」、「ろぞく」の5名称があげられている。明治期には補助名称として1例をみるにすぎなかった「さとうもろこし」が増加し、「蘆粟(ろぞく)」あるいは「ろぞく」と相なかばしている。「もろこし」の名称が拡大していること、「蘆粟」が「もろこし」の1種として位置づけられたこと、が反映しているとみてよいであろう。

甘茎ソルガムの補助名称には、「蘆粟(さとうもろこし)」、「蘆粟(訓なし)」、「琥珀甘蔗」、「支那蘆粟」の旧来からの名称のほかに、「甜高粱」、「ソルゴー」、「スイートソルガム」がある。

「甜高粱」は「東満の飼料植物」〔103〕に用いられている。本書はア・デ・ウェイコフの著書を南満州鉄道調

査部が翻訳したもので、ソルガムを青刈あるいはサイレージ材料の観点から取り扱っている。本書には「甜高粱(サトウモロコシ, ロゾク)」と記され、「甜高粱」はわが国における「蘆粟」と対置されている。

現代の中国では、ソルガムは、「粒用高粱」、「甜高粱(糖用高粱)」、「箒用高粱」の3種類にわけて扱われている。「甜高粱」には「*Sorghum vulgare var saccharatum*」の学名と「*Sorgo*, *Sweet sorghum*, *Sugar sorghum*」の英名が付されている。さらに、「*Coleman sorgo*」は「考尔曼甜高粱」と「*Leoti Sorgo*」は「列斯蒂甜高粱」と表記されている〔163, 164〕。

以上でみると、「甜高粱」は英名「*Sorgo*」と対応する中国語であることがわかる。

「スイートソルガム」、「ソルゴー」は「甘味対策と蘆粟の栽培」〔122〕に記されている。「スイートソルガム」は *grain sorghum*, *grass sorghum*, *broom corn* とともに、用途によるソルガムの区分の一つであるが、「ソルゴー」と同義とされている⁹⁾。

甘茎ソルガムの補助名称としては「蘆粟(訓なし)」が最も多く採用され、多くの場合は「ろぞく」とよまれた様であるが、一部では「さとうもろこし」の訓もあった様である。

箒用ソルガムの名称としては、「箒蜀黍(ほうきもろこし)」、「箒蜀黍(訓なし)」、「箒用もろこし」、「さんさらもろこし」、「ほっすきび」があげられている。「もろこし」系の名称の拡大が明らかに認められ、「箒蜀黍」が「もろこし」の一種と位置づけられていることが伺われる。

以上でみてきた様に、大正、昭和前期のソルガムの名称は「もろこし」が作物名として定着し、「蘆粟」や「箒もろこし」は「もろこし」の1種として明確に位置づけられ、「もろこし」系名称の中に組みこまれてゆく。また、中国大陸への本格的な侵攻に伴い、「高粱」系の名称が定着し、わが国および朝鮮のソルガムは「もろこし」、旧満州におけるそれは「こうりゃん」とよび分けられた。さらに、第2次大戦後はアメリカからの食糧の輸入に伴って、アメリカ系のソルガムの名称が流入した、と総括できよう。

Ⅷ. 昭和20年代頭初の農村における

ソルガムの名称

第2次世界大戦直後のわが国の農村におけるソルガムの名称の分布を「農作物の地方名」〔132〕に基づいて、

第5表 昭和前期におけるソルガムの名称¹⁾

名 称	訓	採 用 例 数		
		主要名称	補助名称	
蜀	黍 もろこし(きび)	14	} 12	
	し ょ く し ょ	} 37		1
	(訓 な し)			5
	もろこし(きび)	6		6
	唐 き び(訓 な し)			1
	と う き び	1		1
	た か き び(み)	2		6
	け ん せ い			1
	黍 (訓 な し)			1
	高 粱 こ お り や ん			1
(訓 な し)	25	10	} 12	
か お り や ん	1	1		
こ ー り あ ん		1		
高 粱 (訓 な し)		3		
高 粱 紅 (訓 な し)		3		
黍 米 (訓 な し)		1		
苡 子 (訓 な し)		1		
マ イ ロ		2		
蘆	粟 ろ ぞ く	1	}	
	さとうもろこし	1		2
	(訓 な し)	3		6
	さとうもろこし	2		
	ろ ぞ く	1		
	琥 珀 甘 蔗(訓 な し)			1
	支 那 蘆 粟(訓 な し)			1
	甜 高 粱(訓 な し)			1
	ソ ル ゴ ー			1
	スイートソルガム			1
箒 蜀 黍	ほうきもろこし	1	} 8	
	(訓 な し)	4		6
	箒(用)もろこし	1		2
	さんさらもろこし			1
	ほっすきび			1
通 常 蜀 黍(訓 な し)		2		
穀 用 蜀 黍(訓 な し)		2		
糖 料 蜀 黍(訓 な し)		2		
糖 密 用 蜀 黍(訓 な し)		1		
甘 茎 蜀 黍(訓 な し)		1		
合 計		82	73	

注) 1) 1950年までを昭和前期とした。75~80, 82~93, 95~98, 100~130の53編を用いた。

2) 他は第3表と同じ

第6表 地域別・名称系列別の名称数および採録数¹⁾

地 域 区 分	とうきび系	もろこし系	たかきび系	きび系	雑きび系	なんばん系	とうじん系	その他	合 計	対総計比(%)
北 海 道	名称数 採録数	1 1	2 2						3 3	4.7 1.8
東 北	名称数 採録数	2 2	2 2	3 5	2 3	8 9		2 2	19 23	29.7 13.9
北 陸	名称数 採録数	1 1	1 2	2 3	1 2	3 3		1 1	9 12	14.1 7.2
関 東	名称数 採録数	1 1	9 13				1 1	1 1	12 16	18.8 9.6
東 山	名称数 採録数	2 3	7 10	1 2	1 2	2 2		3 3	16 22	25.0 13.3
東 海	名称数 採録数	4 7	3 3	1 1	1 1	1 1	2 2	1 1	3 19	16 11.4
近 畿	名称数 採録数	2 6		1 4	1 3	2 2	1 1		7 16	10.9 9.6
山 陰	名称数 採録数	2 2		2 3	3 3		2 2		9 10	14.1 6.0
山 陽	名称数 採録数	1 2		1 2	1 1	1 1	2 2	1 1	7 9	10.9 5.4
四 国	名称数 採録数	2 2		2 5	1 3	3 3	2 2		10 16	15.6 9.0
九 州	名称数 採録数	3 4	2 2	2 7	1 5	1 1		2 2	11 22	17.2 12.7
合 計	名称数 採録数	(7) 31	(13) 32	(6) 34	(3) 23	(19) 22	(5) 9	(2) 2	(9) 166	(63) ²⁾ —
対 総 計 比 (%)	名称数 採録数	10.9 18.7	20.3 19.3	9.3 20.5	4.7 13.9	29.7 13.3	7.8 5.4	3.1 1.2	14.1 7.8	— —

注) 1) 資料番号 [132] による。

2) 2系にまたがるものが1つあるので63となる。

名称系列別に整理し、第6,7表および別表2に示した。

採録名称数は合計63, 採録数は166例である^{脚注)}。

名称系列別に名称をあげると、次の通りである。

1) とうきび系 (7名称)

とうきび, とのきび, ときび, とうきみ, とびき,
とうきん, だごときび

2) もろこし系 (13名称)

もろこしきび, もろこしきみ, あかもろこし, かぎ

もろこし, だごもろこし, だいごもろこし, とうじんも
ろこし (2系にまたがる), とうもろこし, こずきもろ
こし, うまもろこし, しんげんもろこし, ほもろこぎ,
ささもろこし

3) たかきび系 (6名称)

たかきび, たかきみ, せたかきび, せいたかきみ,
たたきび, だごたかきび

4) きび系 (3名称)

きび, きん, きみ

5) 雑きび系 (19名称)

注: 「もろこし」は共通名称として扱い、採録対象から除かれている。

たちきび、だごきび、だんごきび、こなきび、いたきび、まるきみ、ずりきび、はせきび、くろきび、あかきび、うまきみ、とりきび、はしりきび、三尺きび、おだいしきび、てつきやきび、きみもじや、ほうきび、こうらいきび

6) なんばん系 (5 名称)

なんば、まんまんこ、まんまんきび、あきなんばん、かずらんなんばん

7) とうじん系 (2 名称)

とうじんもろこし (2 系にまたがる)、とうじん

8) その他 (9 名称)

こうらい、こうりやん、くびまがり、むるぐし、あかんぼ、ばら、はぜこくれん、けんせい、ほきつ

「とうきび」系の7名称の内、「だごときび」は「団子唐黍」の意で、他はいずれも「とうきび」のなまりによる変化であろう。玉黍蜀を「とうきび」とよぶ地方は北海道、東北、四国、九州に多いが^{注)}、一部これと混同している様である。

「もろこし」系の名称は、既述の様に、「もろこしきび」の「きび」が省かれて出来た名称系列である。「もろこし」の名称で一担当着し、これに形態あるいは利用上の特徴が付されて、様々な名称が生じている。13名称中「はもろこき」、「ささもろこし」は「箒蜀黍」であろう。また、「とうもろこし」は埼玉、長野、愛知、長崎で採録されているが、一部「玉蜀黍」との混同がある様である。

「たかきび」系の名称は利用上の特性から「だごたかきび」が生じた他は「たかきび」の云い換えであろう。

「きび」系名称はいずれも「きび」のなまりである。

「雑きび」系は、他に区分し難い「きび」系名称をもって構成されているため、多様である。いずれも「きび」に形態、利用、生態(熟期など)上の特性を付して様々な名称が生じたものと思われる。「いたきび」、「ずりきび」、「てつきやきび」、「きみもじや」などは、何をもって命名されたのか、よく解らない。「ほうきび」は「穂黍」で、「箒蜀黍」をさしているのかもしれない。

「なんばん」系の5名称は、中国、東山、東海で採録されている。「なんばんきび」は「玉蜀黍」の古称である〔5, 9, 15〕が、形態の類似性から混同されたのであろう。「蜀黍」を「なんばんきび」とする記載は本資料〔132〕以外にはない。

「とうじん」系の名称も古称中にはない。おそらく、

注：北海道、青森、宮城、秋田、山形、福島、茨城、群馬、埼玉、千葉、新潟、富山、石川、福井、山梨、岐阜、兵庫、鳥取、山口、香川、徳島、高知、愛媛、福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎、大分で採録〔132〕。

「もろこし」が定着した後に、「とうじんもろこし」の名が生じ、これから「とうじん」が生じたのであろう。

その他の名称中、「くびまがり」、「あかんぼ」、「ばら」、「ほきつ」は形態上の特徴から命名されたのであろう。「むるぐし」、「はぜこくれん」、「けんせい」の由来はよく解らない。

第6表に、地域別、名称系列別の採録名称数、採録例数をまとめて示した。

採録名称数を地域別にみると、合計63名称中、北海道3(5%)、東北19(30%)、北陸9(14%)、関東12(19%)、東山16(25%)、東海16(25%)、近畿7(11%)、山陰9(14%)、山陽7(11%)、四国10(16%)、九州11(17%)で、東北、東山、東海で多様な名称が採録されている。採録例数は北海道(2%)、山陰(6%)、山陽(5%)は少なく、東北(14%)、東山(13%)、九州(13%)は多い。

一方、名称系列別の名称数の構成は、「とうきび」系7名称(11%)、「もろこし」系13名称(20%)、「たかきび」系6名称(9%)、「きび」系3名称(5%)、「雑きび」系19名称(30%)、「なんばん」系5名称(8%)、「とうじん」系2名称(3%)、その他9名称(14%)であった。採録数の構成は、合計166例中、「とうきび」系31例(19%)、「もろこし」系31例(19%)、「たかきび」系34例(21%)、「きび」系23例(14%)、「雑きび」系22例(13%)、「なんばん」系9例(5%)、「とうじん」系2例(1%)、その他13例(8%)であった。

地域別の採録数の名称系列別の構成を第7表に示した。

北海道は採録数が少ないため、明確な把握は難しいが「たかきび」系が多い様である。

東北は「たちきび」を含む「雑きび」系名称が39%を占め、「たかきび」系がこれについた。

北陸は東北と同じく「雑きび」系と「たかきび」系とが多かったが、「もろこし」系、「きび」系名称がこれについて多かった。

関東は「もろこし」系に集中した。東山は「もろこし」系が多かった。

東海は全名称系列の名称を有していたが、「とうきび」系が最も多く、「もろこし」系、「その他」がこれについた。

近畿は「とうきび」系の頻度が最も高く、「たかきび」系がこれについた。

山陰、山陽は名称系列間の差が少なく、明確な集中傾向を把握し難かったが、「たかきび」系および「とうきび」系名称がやや多い様である。

第7表 名称系列別採録頻度の地域間の差異

地域	合計 採録数	採 録 頻 度 (%)								「物類称呼」等に記載 された名称
		とうきび 系	もろこし 系	たかきび 系	きび 系	雑きび 系	なんばん 系	とうじん 系	その他	
北海道	3	33.3		66.7						
東北	23	8.7	8.7	21.7	13.0	39.1			8.7	たちきみ
北陸	12	8.3	16.7	25.0	16.7	25.0			8.3	きび, ほきび, せいた かきび
関東	16	6.3	81.3					6.3	6.3	もろこし
東山	22	13.6	45.5	9.1	9.1	9.1			13.6	
東海	19	36.8	15.8	5.3	5.3	5.3	10.5	5.3	15.8	もろこしきび
近畿	16	37.5		25.0	18.7	12.5	6.3			たちきび
山陰	10	20.0		30.0	30.0		20.0			きみ
山陽	9	22.2		22.2	11.1	11.1	22.2		11.1	きみ
四国	15	13.3		33.3	20.0	20.0	13.3			たかきび
九州	21	19.0	9.5	33.3	23.8	4.8			9.5	たかきび, こきび

四国では「たかきび」系が多く、「きび」、「雑きび」系がこれについて多かった。

九州では「たかきび」系が多く、「きび」系がこれについていた。

第7表からみると、「とうきび」系の名称は、近畿を中心に、東は東海・東山の一部まで、西は中・四国、九州にまで及んでいる。これに対して「もろこし」系名称は関東を中心に東北、北陸、東海に及んでいる。「たかきび」系名称は四国・九州と北陸に中心があり、前者は山陽、近畿に、後者は山陰、東北、北海道にまで及んだものと考えられる。

「物類称呼」〔19〕等の記載を地域別に、第7表に併記したが、この名称と昭和20年代頭初の主要名称系列とはよく一致し、農村では藩政期以来の名称が、よく保存されていたことが伺われる。

IX. 摘 要

室町時代以降、わが国で用いられたソルガムの名称の経緯、変遷、分布などについて、考察した。また、これと関連して、中国における名称についても若干検討を加えた。

1. 中国におけるソルガムの名称は類似する穀物名と渡来地、栽培開始地、形態の特徴とを結合して形成された。
2. 中国におけるソルガムの名称は多様で、地域により異なることが伺われた。また、名称の多様性には字義のほか、表記に当って、同じ音を異なる文字をもって示したことが関与していると考えられた(第1表)。

3. わが国ではソルガムは1300年代頭初には、すでに和名が付されていた。当時、ソルガムは、外来珍物の黍の意から「たうきび」、「もろこしきび」、形態上の特徴から「たかきび」、「たちきび」などとよばれた。また名称は地域によって異なった(第2表)。

4. 明治期には製糖用として、甘藷ソルガムが導入され、新しいカテゴリーの名称「蘆粟」が加えられた。これは取寄元である崇明島におけるソルガムの名称をそのままうけついでたものであった(第3表)。

5. 明治期には海外からの知見の流入、勸業政策の推進、教育の普及等により、ソルガムの名称は一方で多様化した。が、作物名としては、関東方言である「もろこし」に統一された(第3表)。

6. 大正期については資料が少なく、明確な把握が困難であったが、中国大陸への本格的な侵攻に伴い、「高粱」の名称が定着したほか、旧満州におけるソルガムの名称が、現地音を伴って流入した(第4表)。

7. 昭和前期には「もろこし」が作物名として定着し、「蘆粟」や「籐蜀黍」が「もろこし」の1種として、明確に位置づけられ、「もろこし」系名称に組みこまれた。「高粱」の名称も定着し、旧満州におけるソルガムをよぶ名称として用いられた(第5表)。

8. 第2次大戦後援助物資としてわが国にもたらされた食糧の呼称として、アメリカにおけるソルガムの名称が流入した。

9. 農村では、第2次大戦後においても藩政期以来のソルガムの名称が保持されていた(第6、7表)。

X. 謝 辞

文献の収集をお許しいただいた次の各所に厚くお礼を申し上げます。

岡山大学農学研究所，農業技術研究所遺伝科，果樹試験場，農事試験場，中国農業試験場，四国農業試験場，九州農業試験場，山口県農業試験場，山口県立図書館，日中経済協会，広島県立図書館，広島県立農業短期大学，広島県立畜産試験場。

また，元農事試験場経営第3研究室長 渡辺信夫氏からは同氏所蔵の中国文献の閲覧の機会を与えられ，同時に多くの御教示を頂いた。厚くお礼を申し上げます。

さらに，収集に当っては同僚土居嘉明氏から多大なご協力をいただいた。記して，お礼を申し上げます。

XI. 引用文献

1) 愛知大学中日辞典編纂所編：1968，中日大辞典中日大辞典刊行会，豊橋

2) ド・カンドル：1883，栽培植物の起源（加茂儀一訳）岩波書店，東京

3) Dogget, H : 1970, Sorghum. Longmans. London

4) ————— : 1976, Sorghum. Evolution and Crop plants (Edt. N. W. Simmonds) : 112—116, Longmans, London

5) 古島敏雄：1975 日本農学史第1巻（古島敏雄著作集第5巻）東京大学出版会，東京

6) 飯治二郎：1975 日本農学の再発見 N. H. K. ブックス，東京

7) Martin J. H. : 1936, Sorghum Improvement Year book of Agriculture 1936 : 523~560

8) 日本作物学会：1971 作物学用語集 日作紀40別冊

9) Quinby and J. H. Martin : 1954, Sorghum Improvement, Advances in Agronomy 6 : 305~359

10) 白井光太郎：1930，支那及日本本草学の沿革及本草家の伝記，岩波講座生物学特殊問題3～57

A Consideration on the Traditional Names of Sorghum in China and Japan

Kuniaki MOGAMI

Summary

Collecting the old manuscripts on sorghum in China and Japan, the author tried to get a reasonable understanding on the origin, transmission, domestication and distribution of names of sorghum in Japan. Old names in China were also discussed because sorghum considered to have been brought from China to Japan and written in the same Chinese ideographs, so-called Kanjis, as in China.

1. About thirty names of sorghum in old China were collected from the classic literatures described in China and Japan and were characterized by the combinations of two kanjis, one of which meant the kinds of cereals and another meant the original place of cultivation and introduction or morphological characteristics.

Sorghum was revealed to be called *Kaoliang*, *hongliang* or *huangliang* in northern China which meant tall millet, red seeded millet or yellow seeded one, respectively. In the middle China, *shushu* was adopted principally which meant millet from western areas. However, *shushu* was written in various combinations of different kanjis with the same pronunciation. In the southern parts, *lushu*, *luji*, *luke*, *lusu* and *fanshu* were used which meant millet like a reed for the former four and millet from southern areas for the last. *Lushu luji* and *fanshu* were written in various combinations of different kanjis with the same sound. Excepting described above, *diji*, *ji*, *muji*, *liangshu*, *diliang* and *jiaozi* also were used in some regions in China.

It was concluded that old names of sorghum in China was very much multiformed depending on both diversity in kanjis used and in different descriptions along the same pronunciation of a name.

2. No proof was obtained to ascertain when sorghum reached to Japan through the examination of classic manuscripts in old Japan. However, at the beginning of 14th century, *tokibi* which meant millet from China in Japanese was recorded as sorghum. Therefore, sorghum was proved to be domesticated in Japan in 13th century.

In the literatures published till 1850, the following Japanese names of sorghum obtained; *morokoshikibi*, *morokoshi*, *kagikibi*, *takakibi*, *sanjakukibi*, *kimi*, *hokibi*, *seitakakibi*, *tachikibi*, *kokibi*, *hahakikibi*, *hossukibi*, *sansamorokoshi*, and *kurokibi*. Among those names, *takakibi*, *tachikibi*, *tokibi*, *morokoshi* and *morokoshikibi* seemed to have been used widely. *Takakibi*, which meant tall millet in Japanese, appeared to be ordinary used in south-western parts in Japan. *Tachikibi*, which meant tall and straight millet, used in the north. *Tokibi* found in Kyoto and its suburbs. *Morokoshi* and *morokoshikibi* both of which meant millet from China used in north-eastern Japan, especially in Kanto.

3. Ten years after the Meiji Revolution, sorghum cultivation for sugar production was planned and promoted by Governments introducing the seeds from Chongming Island and from U.S.A.. Sorghum for sugar production was called *rozoku* which meant millet like a reed. *Rozoku* was revealed to be originated from the different reading of kanjis which had been pronounced *lusu* in Chongming Island in China.

Sorghum cultivation of different kinds from sugar production was proceeded in Meiji era. Many new knowledges on sorghum, which were flooded into opened Japan from abroad, made it to be explained by numerous methods and terms in publications. However, the nomenclature of sorghum was unified into *morokoshi* and other traditional named used only in the explanations of *morokoshi*.

4. In the earlier half of 20th century, names in Manchuria were introduced to Japan with its original pronounciations by the tragic aggression of Japan Imperialistic Government to Asian countries. Sorghum in Japan and Korea were usually called *morokoshi* and that in China *kaoliang*. After the defeat in World War II in 1945, American and European names of sorghum, such as *sorgo*, *sorghum* and *milo*, flooded in to Japan and used in publications. However, the traditional names since 17th century had been kept firmly by farmers accompanying with variations in details. The distribution of names in 1950; s age was revealed to be nearly the same as those in old time.

別表1 1980年9月までに収集した資料

資料の番号	刊行年	編者・著者	著書名又は標題	備考
1	530~550	賈思勰	齊民要術	中国
2	1313	王禎	農書	"
3	1578	李時珍	本草綱目	"
4	1573~1615	王象晋	群芳譜	"
5	1612	林穰山	多識篇	"
6	1639	徐光啓	農政全書	中国
7	1628~1676	土居水也	清良記	"
8	1671	名古屋玄以	食物本草	"
9	1680~1682		百姓伝記	"
10	1694	貝原好古	和爾雅	"
11	1697	宮崎安貞	農業全書	"
12	"	人見必大	本朝食鑑	"
13	1698	岡本爲竹	広益本草大成	"
14	1708	貝原益軒	大和本草	"
15	1712	寺島良安	和瀑三才図会	"
16	1722	鹿峰田理	農譚叢	"
17	1733	菊田祐涼	本朝世事談綺	"
18	1769	松岡恕庵	食療正要	"
19	1755	越谷吾山	物類称呼	"
20	1788		万宝節用富貴蔵	"
21	1802	陶朱公	致富奇書	中国
22	1803	小野蘭山	重修本草綱目啓蒙	"
23	1804	曾占春	成形図説	"
24	1828	岩崎灌園	本草図譜	"
25	1834	佐藤信淵	草木六部耕種法	"
26	1843	畔田翠山	古名録	"
27	1848	呉其濬	植物名実図考	中国
28	不明	田中芳男・小野職烈	有用植物図説	"
29	"		東垣食物本草	中国
30	1876	総生寛	農家必携	"
31	"	津田仙	砂糖黍蘆粟の説, I, II	農業雑誌23, 24号
32	1878	小野次郎八ら	砂糖黍蘆粟の説	農業雑誌68号
33	1879	石川 泉	蘆粟并製糖	石川県農事年報明12年
34	1881	東京府	東京府下農物要覧	"
35	"	宮崎柳條	広益農工全書	"
36	1883	(大日本農会)	蘆粟糖ノ結晶セザルノ理由質問	大日本農会報17号
37	"	高井辰二, 市村健吉	琥珀蘆粟にて醬油を製するの法	" 17号
38	"	斉藤健治	穀類産額, 価格及び輸出額統計質問	" 21号
39	1885	小幡平左衛門	琥珀蘆粟の子実を以て酒を製するの法	" 45号
40	"	小鹿島果	日本食誌	"

資料の番号	刊行年	編者・著者	著書名又は標題	備考
41	1885	押川 則吉	牧草の□□及び成分を問う	大日本農会報50号
42	1890	(大日本農会)	蜀黍各号サビキビ	" 113号
43	1892	本田 幸介	普通作物論	(非売品, 試刷か?)
44	不明	"	工芸作物論	九州農試蔵毛筆写本
45	1892	平野 猪之助	植物性栄養品分析成績	大日本農会報133号
46	1893	マックス, フェスカ	日本地産論食用作物篇	
47	1897	森 要太郎	新撰日本農業書	
48	1899	宮崎 文治郎	蜀黍栽培	大日本農会報210号
49	1901	草野正行, 神戸昌平	実用作物各論教科書	
50	"	佐々木 祐太郎	農業大全作物各論	
51	1902	相模 嘉六	食物彙纂	
52	"	田中 節三郎	栽培各論	
53	"	(大日本農会)	蜀黍糸黒穂病	大日本農会報256号
54	1903	矢田 貞吉	実用栽培論	
55	1908	吉川 祐輝	食用作物学各論	
56	1910	長塚 節		
57	1911	神宮 司庁	古事類苑ニ植物之部	
58	1912	鈴木 敬策	工芸用農作物	
59	1913	農商務省	侵水と農作物	
60	1915	満鉄地方部	南満州農業概説	
61	1916	満鉄産業試験場	満州ノ在来農具	
62	1917	香月 嘉六	日本食糧作物大全	
63	1918	宗 光彦	南満州在来農業	満鉄試験場彙報5号
64	1919	農商務省	農務彙纂第73号	
65	"	栃木農試	業務功程(大正8年)	
66	1920	"	"(大正9年)	
67	"	物集 高見	広文庫第19冊	
68	1921	栃木農試	業務功程(大正10年)	
69	"	埼玉農試	"(")	
70	1922	栃木農試	"(大正11年)	
71	1923	"	"(大正12年)	
72	1924	"	"(大正13年)	
73	"	埼玉農試	"(")	
74	1925	吉川 祐輝	糧食作物に就て	大日本農会報529号
75	1926	千葉農試	業務功程(昭和元年)	
76	1927	"	"(昭和2年)	
77	"	埼玉農試	"(")	
78	1928	鈴木 梅太郎(談)	高粱から製紙原料	大日本農会報昭3-9号
79	"	村松 栄	満州の高梁(栽培の巻)	農事試験場彙報27号
80	"	農務省	麦其他穀物要覧	

資料 の 番号	刊行年	編者・著者	著書名又は標題	備考
81	1928	柳田国男	玉蜀黍と蕃椒	方言覚書
82	1929	(大日本農会)	満州に於ける高粱の輸出高は生産額の1割	大日本農会報586号
83	1930	宗正雄	作物学講義食用作物篇	
84	1931	南満州鉄道	満蒙の農業1, 2	大日本農会報613, 614号
85	1932	〃	満蒙の産業とその自然	
86	1933	植田幸輔	満州の農作物	農業635, 636号
87	〃	農務省米穀部	支那に於ける穀物名称の研究	米穀資料第19号
88	1934	大日本農会	工芸作物耕種要綱	
89	1935	服部健三, 近藤信	食用作物学	
90	1936	森谷憲	満州高粱の染色体数に就いて	遺伝学雑誌12巻
91	〃	永井威三郎	作物栽培各論	
92	1937	富民協会	昭和農業発達史付録	
93	〃	原摂祐	実験作物病理学	
94	〃	柳田国男	長門方言	方言覚書
95	〃	岩槻信次	食用作物相談	
96	〃	千葉農試	業務報告(昭和12年)	
97	1938	駕海文彦	繊維作物精説	
98	1939	千葉農試	業務報告(昭和14年)	
99	〃	大日本農会	蘆粟試作(明治前期勸農事蹟輯録下)	明治10~20年を記載
100	〃	近藤万太郎	穀物講義	
101	〃	農務省	穀物要覧	
102	1940	館脇操	満州国に於ける植物分布と農林業I, II	農及園15巻
103	1941	南満州鉄道(訳)	東満の飼料植物	
104	〃	田中定夫	満州に於ける農業観点の二, 三について	農業731号
105	〃	石川正義	支那の農業(その自然条件と地域的類型)	
106	〃	柴野和喜夫	農業経営の革新と畜産業	
107	〃	満鉄弘報課	満州農業図説	
108	1342	高山洋吉(訳)	中国農業(上・下)	
109	〃	久保佐土美	山岳作物の種類, 品種の選定並に栽培技術	農業734, 735号
110	〃	武田総七郎	実験畑作新説	
111	〃	〃	実験特用作物(下)	
112	1943	帝国農会	農業年鑑(昭和18年版)	
113	〃	広瀬保	高粱攷	
114	〃	農商大臣官房	昭和17年第2次農務省統計表農林統計編	
115	1944	宮本三七郎, 大川徳太郎	飼料作物学	
116	〃	古宇田清平	雑穀の増産	
117	〃	〃	戦時下に於ける食糧補強作物蜀黍の栽培	農及園19巻
118	〃	荒川左千代	満州の高粱一主として在来施肥技術に就て	〃
119	1946	実務教育振興中央会	実務教程耕種I	
120	〃	木原芳次郎	穀類	

資料の番号	刊行年	編者・著者	著書名又は標題	備考
121	1947~1964	農 林 省	農 林 統 計	
122	1947	山 崎 守 正	甘味対策と蘆粟の栽培	農及園22巻
123	1948	佐 藤 重 平	有用植物と育種	
124	"	小 原 哲二郎	雑 穀 の 栽 培	
125	"	古宇田 清 平	高冷地に於ける雑穀の栽培法	農及園23巻
126	"	酒 井 幸 平	雑 穀 の 調 理	
127	1949	G. H. Q.	日 本 の 天 然 資 源	
128	"	古宇田 清 平	作物立地論とその実際	
129	1950	九州地方現勢調査委員会	九州地方現勢調査第3集第3分冊	
130	"	永 井 威三郎	技術経営農業綜典	
131	1951	兵庫 県 農 政 部	農 業 改 良 宝 典	
132	"	農林省統計調査部	農 作 物 の 地 方 名	
133	"	沢 村 東 平	雑 穀 編	
134	"	農林省農業改良局	日本に於ける雑穀栽培事情	
135	"	神 崎 優	蘆粟の青刈栽培とその収量	畜産の研究5巻
136	1952	上 田 博 愛	総合作物学雑穀の部	
137	"	山 崎 守 正	食用作物学新講	
138	"	西村修一, 荒田 久	ヒデリに強い青刈り飼料作物, ソルゴの 2度刈栽培	農及園27巻
139	"	三 浦 肆玖楼	食 用 作 物 各 論	
140	"	天 野 元之助	中国農業の諸問題	
141	1953	農 林 省 改 良 局	雑 穀 要 覧	
142	"	"	畑作改善基本調査	
143	1954	沢 村 東 平	農業図説大系-2	
144	"	(勸 農 局)	香港在留英人ピットマン建白1件	農務願末巻2
145	"	(")	清国蘆粟種子購入1件	"
146	"	(")	米国琥珀蘆粟種子購入1件	"
147	"	(")	地質局御届教師ワグネル氏ヨリ質問ニ付蘆 粟裁製近況取調へ回答1件	"
148	1956	農 林 省 改 良 局	主要畑作物品種の特性	
149	"	呉 伝 鈞	中 国 粮 食 地 理	中 国
150	1957	農業発達史調査会	明治10年全国農産表	
151	"	柴 田 桂 太	資 源 植 物 事 典	
152	"	戸川義次, 菅 六郎	食 用 作 物	
153	1958	農 林 省 統 計 部	戦前戦後の作付変動に関する統計資料	
154	"	江 原 薫	飼 料 作 物 学 下	
155	1959	中国農業部種子管理局	全国農作物優良品種	中 国
156	1961	陳先煌, 葉寿春	高 粱 史 話	中国農報1961-10
157	"	天 野 元之助	中 国 農 学 史	
158	1962	村 越 三千男	薬 用 植 物 事 典	
159	1963	町 田 暢	作物大系第3編	
160	1968	松 岡 匡 一	四国地方の在来作物とその分布(1)モロコシ	農業技術 23巻

資料の番号	刊行年	編者・著者	著書名又は標題	備考
161	1369	飯沼二郎	明治前期の農業教育	
162	1972	木原均	黎明期日本の生物史	
163	1974	山西省忻県地区農科所	雑交高粱—選育—制種—栽培	中国
164	〃	広東農林学院翁城分院	雑交高粱的選育和栽培	中国
165	1976	山西省忻県地区農科所	高粱	中国
166	1977	山西省忻県地区種子站	高粱育種和良種繁育	中国

別表2 ソルガムの地方名 (資料132, 農林省統計調査部による)

名 称	北海道	東北	北陸	関東	東山	東海	近畿	山陰	山陽	四国	九州	合計
1. とうきび系												
と う き び○	1	1	1	1	2	3	4	1	2	1	2	19
と の き び					1	2						3
と き び						1	2			1	1	5
と う き み		1										1
と び き						1						1
と う き ん								1				1
だ ご と き び											1	1
2. もろこし系												
も ろ こ し き び○		1	2		1							4
あ か も ろ こ し				2	2	1						5
か ぎ も ろ こ し○				1	1							2
だ ご も ろ こ し				1								1
だ い ご も ろ こ し				2							1	3
と う じ ん も ろ こ し*				1								1
と う も ろ こ し				1	1	1					1	4
ほ も ろ こ し○				3	2	1						6
さ さ も ろ こ し				1								1
こ ず き も ろ こ し				1								1
う ま も ろ こ し					2							2
し ん げ ん も ろ こ し					1							1
も ろ こ し き み		1										1
3. たかきび系												
た か き び○	1	1	2		2	1	4	2	2	4	6	25
だ こ た か き び											1	1
せ い た か き び○			1									1
た か き み	1	3						1				5
せ い た か き み		1										1
た た き び										1		1
4. き び 系												
き び○		2	2		2	1	3	1	1	3	5	20

名 称	北海道	東北	北陸	関東	東山	東海	近畿	山陰	山陽	四国	九州	合 計
きん								1				1
きみ〇		1						1				2
5. 雑きび系												
だごきび											1	1
だんごきび		2										2
こなきび										1		1
たちきび〇	1		1									2
いたきび	1											1
まらきみ	1											1
ほらきび			1				1					2
こうらいきび					1							1
ずりきび									1			1
はせきび	1											1
くろきび〇					1							1
あかきび							1					1
うまきび	1											1
とりきび						1						1
三尺きび〇			1									1
おだいしきび										1		1
はしりきび										1		1
てっきやきび	1											1
きみもじや	1											1
6. なんばん系												
なんばん					1	1			1	1		4
まんまこ								1				1
まんまんきび								1		1		2
あきなんばん									1			1
かずらんなんばん						1						1
7. とうじん系												
とうじん							1					1
とうじんもろこし*				1								1
8. その他												
こうらい					2	2						4
こうりゃん	1		1			2					1	5
くびまがり					1							1
むるぐし	1											1
あかんぼ					1							1
はぜこくれん			1									1
けんせい						1						1
ほきつ											1	1
ばら								1				1

注) 1. *は2系にまたがっている。

2. 〇は藩政期以前に出ている名称